



古藤 寛規

(富山市経堂)  
ことう動物病院長

暑い日が続き、人もペットも熱中症には気を付けたいですね。今回は「短頭種気道症候群」を紹介しましょう。

名前の通りブルドッグやパグ、フレンチブルドッグなどの短頭犬種で発症しやすい病気です。症状はいびきやストライダー（喉がガーガー鳴る）を伴う呼吸困難、意識消失、チアノーゼ（舌の色が紫になる）などがあります。

これらは鼻の穴が狭い「外鼻孔狭窄」や、喉の奥の粘膜が長く分厚い「軟口蓋過長」、気管低形成などの解剖学的な異常によって生じます。つまり、生まれつきの鼻・喉・気管の構造上、空気の通り

### 短頭種気道症候群



外鼻孔拡張術の術前④と術後⑤。術後は鼻の穴が広がっている



## 生まれつき呼吸しづらい

道が狭いので、頑張って空気を吸い込まなくてはならなくなるといことです。

短頭犬種が他の犬種と比較して熱中症になりやすいのも、この特徴によるものです。若いうちは咽頭の周辺の筋肉も柔軟なので、气道が狭くてもあまり支障なく生活できますが、高齢になってくると周辺組織に経年負荷がかかり、呼吸状態が悪化してしまいます。

治療は「内科的管理」と「外科的治療」の組み合わせで行います。内科的管理は体重のコントロール、涼しい環境での飼育、抗炎症薬などがあります。外科的治療は、狭い气道を広げて空気を減らすことが目的です。

「气道抵抗は气道の長さや気体の流速に比例し、气道半径の4乗に反比例する」という「ポアズイユの法則」があります。簡単に言

うと、气道の広さが2倍になれば、气道抵抗は16分の1になる。つまり鼻の穴や喉のスペースが2倍増えれば、16分の1の力で呼吸できるといことです。

よく行われるのは、鼻の穴を広げる「外鼻孔拡張術」と咽頭の余分に伸びた組織を切除する「軟口蓋切除術」の組み合わせです。手術の時期としては、高齢になり組織の変性が起こってから施術する

よりも、若い時に行う方が予後が良いとされています。

もちろん短頭犬種の全てで治療が必要なわけではなく、症状が軽く治療が必要のない犬もたくさんいます。気になる症状がある場合は、かかりつけの獣医の先生に相談してみてください。

毎月第1土曜掲載